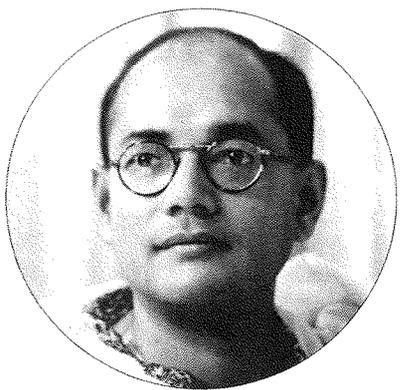


相馬黒光著 『ラス・ビハリ・ボース覚書』（筑摩書房『アジア主義』より）

その信念を、葬儀の場で弔辞を読んだ木下尚江は「笑って断頭台に上る人だ」と語った。これは、俊子の弟も彼女をそう評したことがあったことから「木下さんの眼にも同じ俊子が映っていた。俊子も地下にはほえむである」と黒光は、母親として、むしろ雄々しく娘の人生を讃えている。なお、ボースと俊子の息子、正秀は、一九四五年六月、沖縄戦にて戦死しており、彼の英霊は靖国神社に祀られている。

頭山満、相馬夫妻、そして若き人生をビハリ・ボースへの愛と献身に捧げた俊子、そして多くの志士たち、また名もなき中村屋の店員たち、彼らに共通してあったのは、ここ日本で窮地に追い込まれた正義の人物は異民族であろうと守り抜く、そのためにはいかなる権力であれ恐れることなく振る舞うという信念だ。このような人々の思いこそが、日本をアジアのリーダーとし、また、インドをはじめとするアジア諸国の解放のために立ちあがらせたのである。



第四章 受け継がれる「独立」への意志

大東亞戦争開戦とインド独立連盟の結成

ビハリ・ボースは日本でたくさん著作を発表している。現在ではあまり読まれてはいないが、インドにおけるイギリスの圧政と、それに抵抗するインドの抵抗運動について、日本国民や政治家に訴えた歴史的に貴重な文献ばかりだ。さらにビハリ・ボースは、アジアと西洋の闘争を、岡倉天心やタゴールのように精神的、思想的な戦いとみなす思想を持っていた。

亜細亜は世界の多くの民族（いずれもとても重要な民族だが）の母であり、世界のあらゆる重要な言語の母であり、又世界の最も重要な宗教——その中にキリスト教も含む——の母である。他の大陸に伝播し、且つ偉大なる発達を遂げた諸宗教——亜細亜、阿弗利加両大陸における回教、欧米におけるユダヤ教及キリスト教等——すらも、その端緒を亜細亜に発したのであった。

ラス・ビハリ・ボース著『青年亜細亜の勝利』平凡社

アジアは世界の五大宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教が生まれた地である。さらに、アルファベット、十進法、天文学、羅針盤、印刷術など、人類に貢献した発明の起源もアジアにある。しかし西欧は、大航海時代からの植民地主義に支えられ、イギリスの産業革命以降は機械文明とともに近代国家と資本主義を発展させた。豊かな大陸であったアジアは欧米の支配下に置かれ、搾取されることで、精神的にも劣等感を抱くようになっていった。アジア人自身が、白人は非白人よりも優秀で強いのだという誤った考えを抱くようになった。こうした考えを打ち破ったのが、日露戦争における日本の勝利であった。これは単に日本国がロシアに軍事的に勝利したというだけの事件ではない。日露戦争における日本の勝利は、服従の昏睡に陥っていたアジア全体を覚醒させたのである。

アジア更生の運動がこの広大なる大陸の各国に興ったのは、実に日露戦争の時からであった。彼等の国を外国の勢力範囲から自由にする目的を以て、青年トルコ党が

くられたのも、青年ベルシャ人が祖国の独立のために団結したのも、青年印度人の魂が刺激されて独立獲得運動に乗り出したのも、支那が真の「支那民族で成り立つ、民族のための、又民族による」政府を夢み初めたのも、日露戦争以後のことであった。他のアジア小国も多年の昏睡から覚め、人類の進歩のために、今まで失ってきた時間を償うべく努力し始めたのであった。

ラス・ビハリ・ボース著『青年亜細亜の勝利』平凡社

しかしビハリ・ボースは、アジアの復興とは、単にアジア諸国が独立し、ヨーロッパのような力を持つこと、他者を支配することであってはならないと説いた。

アジアの使命は欧羅巴のそれと全く異なるのである。西洋は其の勢力と智識を人類のために使用せずに、自己の勝手な目的及び自利拡大のために用い、幾百万の人間を犠牲にしたのであった。之に反し、独立及び自由を得たるアジアは、自己の利己的利益のためでなく、世界平和のために、また階級、主義、皮膚の色及び宗教に関係なく、

此の地上の全人類の幸福と満足のために尽力するであろう。即ち独立アジアの主たる使命は、全人類を幸福にし得る新文明を産み出すことである。

ラス・ビハリ・ボース著『青年亜細亜の勝利』平凡社

ビハリ・ボースはこのように、後の大東亜会議宣言、またバンドン会議、そして世界連邦的な理想を予言するような思想のもとに、言論活動、政治活動を行い続けた。

そしてビハリ・ボースは、日露戦争における日本の勝利を、単に指揮官の優秀さや日本の近代的発展の結果とのみ見ていたのではない。ビハリ・ボースは満洲国を旅して旅順の戦跡を訪ね、同地の戦跡博物館を訪問したときに、展示されていた日本側の武器がロシアの武器よりもはるかに劣った装備であることに逆に感銘を受けたと記している。物質面では劣勢だった日本のロシアに対する勝利を、ビハリ・ボースは、白人に対する有色人種の勝利、ヨーロッパ植民地体制に対するアジアの勝利という概念を越えた、「唯物的文明に対する精神文明の勝利」という真理を世界に示したものとして受け止めた。

そして、インドの植民地化こそ、イギリスをはじめヨーロッパ諸国が、アジア全土への

植民地化の基礎を生み出したとビハリ・ボースは考え、イギリスによるインドの富の収奪こそが、ヨーロッパを栄えさせ、アジアに屈辱をもたらした根本原因であり、だからこそ、インドの独立はインドだけの問題ではなく、全アジアの解放と独立、ひいてはヨーロッパによりゆがめられた世界全体の救済につながるとみなした。同時に、欧米においても現状は決して幸福ではなく、アジア人同様、いや、それ以上に抑圧されている国や民族も存在することをビハリ・ボースは指摘し、すべてを解放することがアジアの使命だと述べた。

蓋し印度さえ独立してしまえば、今日白人に虐げられているあらゆる人類は自由の大地に開放され、人道的にも本来の姿に立還ることが出来るからである。それに依つて、吾々は完全なる亜細亜大陸を見ることが出来るからである。

(中略) しかし偉大なる精神文明を呼び醒まし、その偉大さに立脚して新らしい文明を建設して行くべき亜細亜人の将来には幸福が約束されているのみならず、その復興に依つて、苦しみつつある欧米人をも幸福にすることが出来るのである。故に亜細亜人の使命は、世界人類に対するの使命であり、此の使命を果し得た時にこそ、亜細亜

人は全世界と共に幸福を迎えるのである。

ラス・ビハリ・ボース著『青年亜細亜の勝利』平凡社

ビハリ・ボースの思想が、岡倉天心の「アジアは一つ」という理念、また、タゴールの人類愛の思想と深い共通性を持つことがわかる言葉だ。天心、タゴールという思想家の理想は、ビハリ・ボースのなかで政治運動としても引き継がれていたのだ。そして、この理想に基づいて、ビハリ・ボースはまず、国外のインド独立運動の団結をめざした。ビハリ・ボースが行った最も意義ある政治活動、インド独立連盟の結成であった。

一九四〇年二月八日、日本が英米に宣戦布告し大東亜戦争が開戦するとともに、これこそインド独立の好機と、東アジア各地で活動していたインド独立運動家たちは立ち上がった。彼らをまとめるために活動した一人が、戦後銀座にインドレストランを開店するA・M・ナイルである。彼は回顧録『知られざるインド独立闘争』（風濤社）にて、アジア各地のインド独立の志士たちをまとめ上げ「インド独立連盟」という組織をつくり上げたのはビハリ・ボースの力であり、同時に日本の大本営の協力によるものだと断言している。

われわれが目ざしたのは、日本も含めて東南アジア全体に在住するインド人の組織を確立し、どうすればこの急変した情勢をインド解放の促進に最も有効に利用できるかの指針を打ち出すことだった

A・M・ナイル著『知られざるインド独立闘争』風濤社

それまでばらばらに活動していた各地域の独立運動を統一し、単一の組織化のもとに展開すること。日本側でこれを担当したのは、参謀総長の杉山元陸軍大将だった。一九四二年二月、「インド独立連盟」が山王ホテル二〇二号室を本部に結成された。

まず取り組まれたのは、日本軍が目覚ましい進軍を遂げている東南アジアで、インド居留民を、敵国民とはみなさずに保護することを軍当局に頼むことだった。この願いは聞き届けられ、現地でインド人を見分けるためには「ガンデー」と尋ねて、うなずくだけでもいいから肯定的な反応があれば、丁重に扱うように、という指示まであったという。

そして東京のインド独立連盟にも、何千人という人々が参加、協力を申し出てきた。し

かし、ビハリ・ボース、ナイル、杉山の間では、すでに参加にあたっての取り決めができていた。その原則は次のようなものだった。

- ①この組織はいかなる時も「アナーサクタ・カルマ（無執着の仕事）」という概念にのっとり、個人やグループの私利私欲のための行動は絶対に行わない。
- ②各団体がこれまでではどんな文化的、政治的その他の名称を名乗っていたにせよ、連盟を結成した以上、心を一つにすること。
- ③連盟はインド国内で活動するインド国民会議派の指導者たちを支援する形で行動し、それに反対もしくは中傷するようなことをしてはならない。
- ④インド国民以外は連盟に加盟できず、活動にも参加できない。
- ⑤日本当局の協力は必要であり歓迎するが、政策の立案と実行はすべて連盟が行い、いかなる干渉も受けない。

A・M・ナイル著『知られざるインド独立闘争』風濤社

ここには、民族独立運動はあくまでその民族を主体としたもので、他国から支援を受け

る場合も自分たちの運動方針については自分たちが決める、そしてメンバーに、日本人の加盟は認めない、という原則が明確に記されていた。

同時期、東南アジアの戦地では、藤原岩市少佐を中心にした「F機関」が活動し、イギリス軍として動員されたインド人将校、モハン・シンを中心に「インド国民軍」の結成が進められていた。

一九四二年二月一五日、シンガポール陥落。東條英機首相は国会で、日本はインド人を敵とみなさず、インドの独立運動を支援する、今こそインド人は決起してイギリスを追放すべきときであり、また日本の支援は「無執着の援助」であり、インドを支配する意志など毛頭ない、と演説した。独立連盟と日本政府の連帯をよく示した演説だった。

そして三月二五日、東京にて、各地域の独立運動家が結集したインド独立連盟東京会議が開催された。会議は三日間で閉会、より現場に近い東南アジアのバンコクで早急に第二回会議を行うことを決定する。また、インド独立連盟本部もバンコクに移転することになった。日本の参謀本部も密接な連携をとるために、岩畔豪雄大将が新たに大きな工作機関を編成することになり、F機関もそこに統合され「光機関」と名付けられた。基本的にこの

機関の詳細は秘密とされ、ビハリ・ボース、ナイル、岩畔の三名が基本的な方針を決めることになった。

六月一五日に開始されたバンコク会議には、ラス・ビハリ・ボースを議長に、マレー半島、日本、タイ、中国、満洲、フィリピン、ボルネオなどから、一二〇名の代表が集まった。東條首相からもメッセージが寄せられている。この会議では、結成されつつあったインド国民軍は、独断専行の傾向があるモハン・シン単独の指揮から切り離し、正式にインド独立連盟の指揮下に入ることが決定された。このほかにも、個性が強くそれぞれ独自の主張をする各地の運動家たちをまとめ上げたのは、まさにビハリ・ボースの人間性と寛容さ、そして、原則を曲げない姿勢だった。

バンコクを拠点に、インド独立連盟はインド国内への活発な宣伝活動を続け、またインド国内でも、一九四二年八月八日ボンベイで開かれたインド国民会議派全国委員会は、イギリスの即時撤退を要求して、クイット・インディア（インドを立ち去れ）決議を採択し、イギリスが要求を拒否すれば非暴力の大衆運動を全国的に展開することを表明した。しかし、イギリス当局はただちに、ガンディー、ネルーなど会議派指導者を逮捕し、抗議する

民衆のうち約六万人が逮捕されるという全国的な事態を招いた。日本軍の進撃は、確実にインド国内に影響を与えていたということがわかる。

当時インド国民軍がいたのはシンガポールだったが、モハン・シンの独裁的な指揮のために現場は大混乱の状態で、軍として立て直すのもビハリ・ボースの仕事だった。インド国民軍が常にチャンドラ・ボースとともに語られることに対し、ナイルは、インド国民軍を規律正しい軍隊として整備したのはビハリ・ボースの仕事だったことを強調している。そして日本軍も、インド人捕虜を他の捕虜とは区別し、肉体労働などをさせず、国民軍に協力させた。

新たな国民軍司令官には人望のあるボンスレー大佐が任命され、スタッフも優秀な軍人や宣伝担当者がそろえられた。しかし、ビハリ・ボースのインド独立連盟結成、そしてインド国民軍編成の最も大きな意義は、インド人に国民としての一体感を持たせたことにあった。イギリスの分割統治の原則は、インドの各部落、各宗派を分割して対立させ、それに乗じて支配することにあつた。ビハリ・ボースはそのような対立を、インド人を團結させることで打破したのだ。

ラシュ・ビハリ・ボースのインド国民軍再建に対する貢献は大きかったが、その一つとして、国民軍の兵士たちに、インドは多様ではあるが基本的には一つであるという意識を植えたことがあげられる。インド国民軍にはいろいろな州の、宗教、習慣、風俗、生い立ちの異なる人々が含まれていた。このように異質なグループに、すべての違いを乗り越えて、イギリスの支配と闘う同じ責任と力を持つ、同じインド人同士なのだという意識を育てることに成功したのだ。

A・M・ナイル著『知られざるインド独立闘争』風濤社

ビハリ・ボースからチャンドラ・ボースへ

しかし、インド諸団体の取りまとめ、一部の独断専行型のメンバーに対する処理、日本軍との交渉、さらには東南アジア各地を転々とする激しい行動などのなか、ビハリ・ボースの体は、持病の糖尿病の悪化などもあり、次第に衰えていった。一九四三年に入ると、



スバス・チャンドラ・ボース

され、ボース自身も危険人物としてイギリス当局に逮捕監禁されてしまった。しかし、一二月、一時的に仮釈放されたチャンスにインドを脱出、ドイツに亡命する。

しかし、有色人種を基本的に差別するナチス体制に、ボースが受け入れられるはずはなかった。ヒトラーはイギリスのインド支配に別に反対ではなく、

ド国民会議の議長にも当選する。しかし、ボースの影響力があまりに強まり、イギリス当局との全面対決になることを恐れたのか、ガンディーら指導部はボースを退陣させ、事実上の幽閉状態に置いた。そのようななか、第二次世界大戦が勃発する。

イギリスとドイツの戦争が始まったことを知り、ドイツはインド独立のチャンスが来たことを悟った。ボースはナチスの思想に共感していたわけではなく、インド独立のためならばいかなる勢力とも手を組む覚悟でいたのだ。ボースはこの好機にインド全土での民衆蜂起を呼びかけるべきだとガンディーらに提案したが、その意見は危険すぎるとして否定

さらに病状は悪化し、運動の指揮を執ることは難しくなっていた。

もともと、インド独立連盟、すなわち海外における独立運動の指導者はビハリ・ボース以外考えられなかったが、戦争の最中でもあり、万が一のためには代わりを務めうる人物も備えておくべきであった。この点では、ナイルは早くから（彼の著書によれば大東亜戦争開戦直後の段階から）ドイツにいたスバス・チャンドラ・ボースの招請を提案していた。

チャンドラ・ボースは、一八九七年に、インド・ベンガル州カタック（現在はオリッサ州）に生まれた。カルカッタ大学に進学したが、イギリスの支配に抗議する学生ストライキを指導、停学処分を受ける。その後、ケンブリッジ大学に留学。タゴール同様、アジアとヨーロッパ双方の学問を受けた。

一九二一年から、チャンドラ・ボースはますます独立運動に参加していくが、ガンディーを尊敬しつつも、その非暴力抵抗運動に対しては、崇高な理想だが、現実の独立は武力をもって行動しなければ得られないと考えていた。明確な独立志向と優れた弁舌で民衆の支持を集め、インド国民会議派内部の急進左派（ボースはインド国内の貧困救済などのために一定の社会主義的政策を採り入れる必要性も考えていた）として活躍し、一時期はイン

ボースは何度も独立への支援を求めたが、ほとんど相手にされなかった。ボースは日本が英米に宣戦布告するや、日本に期待を向けるようになり、インド独立連盟の結成後は、特に大島駐独大使を通じて、日本行きを強く求めるようになっていた。インド独立連盟にとっても、日本にとつても、チャンドラ・ボースはまさにうつつけの、著名な、しかも軍事行動を辞さぬ指導者だったのである。一九四三年二月八日、チャンドラ・ボースはドイツ海軍の潜水艦Uボートで出発、四月二七日に、アフリカのマダガスカル島東南沖で日本の潜水艦に乗りかえ、五月一六日に東京に到着した。ビハリ・ボースは、体調が悪いにもかかわらず東京に向かい、チャンドラ・ボースと会見し労をねぎらっている。東條首相も、当初は疑っていたが、チャンドラ・ボースとの会見で、彼の情熱と人格にうたれ、全面的な支持を表明した。

そして、ビハリ・ボースとチャンドラ・ボースは同じ飛行機でシンガポール（当時は「昭南市」と命名されていた）に向かい、一九四三年六月四日、同市における「大東亜劇場（キャセイ・ホール）」にて、インド独立連盟代表人会議が開かれ、インド独立連盟ならびにインド国民軍の主導権が、ビハリ・ボースからチャンドラ・ボースに引き継がれることが正式に発表された。その時のビハリ・ボースの演説を抄録紹介する。

諸君、武装せる勇士諸君！

（中略）今日我々は母国解放戦の最も活氣的、最も決定的態勢に入らんとしているのであります。

私は確信いたします。我々は今や正に勝利の入口に立っているのであります。

※

諸君、印度独立運動の東亜に組織されて以来、今や一年有半の日時を経たのであります。

凡ゆる實際目的をトす最も記念すべき日、即ち一九四一年二月八日こそ、大日本帝国が正義の剣の鞘を抜き放ち米英帝国主義を破壊し、亜細亞諸民族をその桎梏より解放せむと敢然立ち上った日であります。且つ又此の歴史的二月八日こそ印度独立運動を今日の形に成した発端を記念すべき日であるのであります

※

(中略) 印度国内に於いて、反英革命は既に十一ヶ月も続けられているのであります。英国は日ならずして此の革命を粉碎してしまふと豪語していたのであります。が彼らは失敗したではありませんか。而も彼等の闘士達へ加へられた凡ゆる残忍なる暴力、抑制にも不拘ふくわら、惨めにも失敗に帰しているのであります。

印度国境外には我等東亜在住印度人は、国内印度民主主義の努力を補足、援助すべく布陣待機しているのであります。

(中略) 大日本帝国首相東條英機大将閣下がアングロアメリカ勢力撃滅の印度聖戦に對し、日本は全面的援助下さる誓約を再度強調されましたのは、私が東京に居りました遂つひ先日のことであります。

※

(中略) 諸君、諸君は印度の勝利は確実なりと、私が確信する理由を既に了解されたのであります。

(中略) 故に印度人としての我々の義務は誠に明瞭であります。

印度の自由の爲めに、世界の正義、道義のために、人間生活、交際のよりよき秩序

のために、我等印度人は日本並びに枢軸国の勝利のために努力を捧げ、断然戦わねばならぬのであります。

(中略) 日本並びに枢軸国の勝利は、印度の自由、四億の印度人の自由、亜細亜の光輝、世界新秩序の勝利を意味するのであります。

※

(中略) 諸君、武装せる勇士諸君、次に諸君は、私が東京に於いて我等の問題に對し何を成したか、又私が此処へ何を齎もたらしたかと尋ねるであります。

私が諸君の下に齎したものをこれであります。(スバス氏の方へ向き直りつつ) スリヂュート・スバス・チャンドラ・ボース氏は諸君にも、印度へも將た世界へも、今更紹介する必要は全くない人であります。

氏は印度青年層における最善、最高尚、最も敬愛すべき又最も活動的なる最高、最上の一切を兼備せる男児の象徴であります。

英帝国主義に抗争する全印度指導者として、氏は第一位に位するものであります。

同氏は赫々たる最高指導者であると共に絶対妥協せぬ断乎たる闘士であります。

(中略) 諸君、今こそ私の生涯を通じ、私にとつては最も幸福なる一と時でありませう。私は印度自由の我等の闘争に参画する、我等の神聖なる母国特徴、特質を最も具備せる唯一人者を諸君の前に同伴したのであります。

東亜在住二百万の印度人がスバス氏に捧げたる心からなる、熱狂的歓迎も同氏に対し、否私自身にとつても、又印度にとつても、猶十分とは言えぬのであります。

諸君、武装せる勇士諸君、私は今日唯今、私の総裁たるの位置を退き、印度救世主スバス・チャンドラ・ボース氏を、東亜印度独立連盟総統に指名致します。

唯今より後、スバス・チャンドラ・ボース氏は諸君の総裁であり、印度独立戦の指導者であります。

私は断乎確信致します。氏の指導下諸君は戦え、勝利に敢然進軍することを。

ラス・ビハリ・ボース『ボースは叫ぶ』盛運堂

この時のビハリ・ボースの態度を、すべての関係者は賞賛してやまなかつた。偉大な指導者が自ら進んで、指導権を他人に、しかも心からの喜びと敬意をこめて譲り渡すというのは、独立運動家の中でもめつたに見られない姿勢だつた。

ナイルの著書によれば、ビハリ・ボースは、チャンドラ・ボースの、日本軍と共にインドに侵攻するという姿勢に対しては消極的だつたという。だが、実際に指導権を譲つてからは、個人的な忠告はしても、公的な場でチャンドラ・ボースに異を唱えることや運動に口出しすることは一切しなかつた。

指導権を禅譲したのち、日本に帰国したビハリ・ボースの体調はさらに衰えていった。インパール作戦の敗北や悪化する戦況のなか、一九四四年に出版された最後の著書『ボースは叫ぶ』(盛運堂)の冒頭に、彼は次のような詩を残している。

吾は此処に厳かに誓う 来る可き艱難の如何に大なりと雖も

吾は寸刻、昼夜も憩わじ

自由旗の我等の母国をおうて翻る日迄

自由旗の我等の手に依り打ち立てられる日迄

吾は此処に敵かに誓う 来るべき艱難の如何に怖るべきものと雖も

吾は自らを喜びて犠牲に供せむ

吾が愛する母国に報ぜんは今

吾が力もて母国の難を排除せん

吾は此処に敵かに誓う 来るべき艱難の如何に大なりと雖も

吾は仇敵撃滅に協力せん

不幸なる枷カサに泣く母国を自由にせん

暴英桎梏の絆を断乎絶たん

吾は此処に敵かに誓う 来るべき艱難の如何に怖るべきものと雖も

吾は喜びて召に応ぜん、顧みはせじ

吾が此の手もて敵を究追せん

海を越え彼が本土に迫る迄

吾は此処に敵かに誓う 来るべき艱難の如何に大なりと雖も

我が子、我が妻、持てる一切を棄て

我が一切を挙げ誓いを果さん

我が愛する母国のために、我は国子なれば

ラス・ビハリ・ボース 『ボースは叫ぶ』 盛運堂

この文章は、ビハリ・ボースにとって、インドと日本がともに母国として歌われているように読める。一九四五年一月、ビハリ・ボースは世を去った。前章でも触れたように、同じ年の六月、沖繩戦で、ビハリ・ボースと最愛の妻・俊子との息子・正秀も戦死する。ボースとその一家は、すべてをインド独立とアジア解放の運動に捧げ、また、日本とインドの偉大な架け橋を築いた。

ビハリ・ボースの功績は、頭山満翁や相馬夫妻、そのほか彼を支援した多くの日本人がいたからこそである。特に相馬夫妻が娘・俊子をビハリ・ボースに嫁がせたことは、驚きとしか言いようがない。将来性もない、明日捕まって殺されてしまうかもしれない懸賞金つき指名手配中のインド人に、喜んで娘を嫁がせる親がいるだろうか。たとえ頭山満翁からの縁談であっても、また俊子本人が結婚を承諾しても、親としてその結婚を許すことは大変な勇気があることだったろう。しかし、相馬夫妻はころよくビハリ・ボースに娘を嫁がせ、その後も支援を続けた。私はこのことをはじめて知ったとき、大変な衝撃を受けた。ここまでしてくれるのが日本人なのだ。ビハリ・ボースを想うとき、私は彼を支えた日本人に対する尊敬の念があふれてくるのを抑えることができない。



第五章 チヤンドラ・ボースとインド国民軍